



地域日本語支援ニュース こだま 第 303 号

2016.9.8



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ともに生きる■

‘み’んなの‘ち’からで 道を作っていきたい  
～ゲームやまちあるきで高める「防災」意識～  
多文化演劇ユニット MICHIE 山田久子

2■高校進学進路ガイダンス情報(9、10月)■

=====

1■ともに生きる■

‘み’んなの‘ち’からで 道を作っていきたい  
～ゲームやまちあるきで高める「防災」意識～

多文化演劇ユニット MICHIE 山田久子

-----  
多文化演劇ユニット MICHIE は、岐阜県可児市を拠点として 2011 年に結成された、多国籍の演劇ワークショップユニットです。演劇という手法を通し、生活にまつわる様々な事柄について、視覚と体験によって理解を深めるワークショップを実施しています。活動開始から 5 年目を迎え、県内のみならず、周辺地域にも活動拠点を広げる MICHIE の活動について、代表の山田久子さんにご紹介いただきました。

-----

◇防災をテーマにしたワークショップ

私たちのワークショップ（以下、WS）は、生活にまつわる様々な事柄について、演劇という手法を通して理解を深めることを目的としています。「演劇という手法を通して……」と言うと難しく聞こえるかもしれませんが、コミュニケーションゲームや寸劇を利用して、日本語がわからない人でも、見ることで理解ができたり、体験から理解が深まるような WS を行っています。MICHİ の WS のテーマは多岐にわたっていて、冠婚葬祭などのご近所づきあいや、ビジネスマナーの WS も行いましたが、私たちが一番多く行っているのは「防災」をテーマにした WS です。いつ来るかもしれない災害に対して備えをしておくことはとても大切なことですが、それを言葉も文化も違う外国人住民にどう伝えたらいいのだろうか困っている自治体や支援団体も多く、様々な場所で WS を行わせていただいています。

#### ◇楽しみながら考え、体験する

防災 WS では、自分や家族を守るために必要なことを楽しみながら考えたり、体験できるようにしています。「地震の時には頭を守る」「洪水の時には高いところに逃げる」などの災害時の初期行動については、イス取りゲーム要領で「じしん」と言ったら頭をイスの下に隠すなど、言葉と動作をつなげて練習し、さらに災害時に聞こえてくる音（緊急地震速報など）も一緒に体験します。他にも、災害時には普段の生活では聞かない言葉がたくさん出てくるので、その言葉を伝言ゲームで聞いて伝えて練習することもしています。また、外国人住民の中には避難所の存在を知らない人も多くいるので、日用品が描かれているカードから避難する際に持ち出す物を選び取るゲームをしながら、家に住めなくなった時にどこに行けばいいのか考えてもらい、困っている人が誰でも行くことが出来る場所「避難所」があることを紹介しています。

#### ◇災害時の行動について考える機会を提供

WS をしていると様々な反応が返ってきます。災害時の行動にはこれという正解はなく、その時の状況に応じて判断していくことが必要になっていきます。私たちは外国人住民がその判断をするために必要な情報をひとつでも多く提供し、その時自分はどうするだろうかと考える機会を1回でも多く提供していきたいと考えています。

MICHİ のブラジル人メンバーの住吉エリオ洋一は言います。  
「災害が起こった時ブラジル人の SNS は『誰も助けてくれない』など、とんで

もない声ばかり。それは色々な支援があることを知らないからだけど、ちょっと違うなとも思っている。だって、情報はたくさんあるのに、多くのブラジル人はそれを知ろうとしていないだけだから。それがとても残念。だから僕はMICHIの活動で、ブラジル人と日本社会との架け橋になりたいと思っているんだ。」

#### ◇「防災まちあるき」で体感として理解する

MICHIでは、街の中を歩きながら防災を考える「防災まちあるき」も行っています。これは、決められたルートを歩きながら、いくつかのチェックポイントを探すというものです。チェックポイントには、ブロック塀や側溝などの災害時に危険な場所や、消火栓や周りに高い建物のない広場などの災害時に役に立つ場所が入っており、チェックポイントを探し当てた時には、その場所でこの場所がなぜ危険なのか、どんな時に役に立つ場所なのかを伝えています。それは、写真を見ただけではイメージしにくいことも、その場所に行って、それがどんな場所であって、どのくらいの大きさのものなのか見た上で情報を提供することで、イメージしやすく体感として理解することができ、さらに自宅周辺や行動範囲の中で同じような場所を見た時にも、自分で判断する手助けになると考えているからです。

#### ◇防災のスペシャリストに協力を依頼

このプログラムを作成するにあたって、私たちは防災のスペシャリストである防災士（日本防災士機構の認証資格者）に協力を依頼し、街の中にある防災に関する場所について様々なことを教えていただきました。そして、その中でも私たちが特に重要だと感じた場所をチェックポイントにして、最初の「防災まちあるき」を行いました。その時には、チェックポイントをすべて探し終えた後に、全体のふりかえりとして解説をすることになっていたのですが、参加者は写真の場所を見つけたら、また別の場所を探すことに気を取られ、その場所をじっくり見ることもなく、後から解説をしても理解が進んでいないようでした。その反省から、その後はチェックポイントで一度解説をし、まちあるき終了後のふりかえりでもう一度確認することにしました。そうすることで、まちあるきの最中にも参加者からチェックポイントについて質問がでるようになり、さらなる理解につながっています。

#### ◇災害時の外国人住民支援を考えるきっかけにも

災害はいつ起こるかわかりません。ですから、「防災まちあるき」は基本的には雨天決行、夜間に行ったこともあります。参加者の安全確保のためにたくさんの協力者が必要です。私たちはその役割を地域の防災士の方々にお願いして、参加者と一緒に街を歩きながらチェックポイントの解説もしてもらっています。参加者からの様々な疑問に即座に対応していただくこともできますし、それだけでなく、防災士の皆さんには、そのような参加者との交流を通して、災害時に外国人住民に対してどんな支援が必要になるのか考えるきっかけにしたいと考えているからです。それは、以前ある防災士の方から「避難所の看板は、文字が漢字で書かれているから、外国の方や小さな子供には読めませんね、今日気づきました」とお話しいただいて、改めて様々な視点にたって防災や物事を考えることの大切さを感じたからです。

#### ◇認め合い、助け合い、ともに考える

私たちの活動は「教える」ではなく「一緒に考える」ことだと思っています。これまでも外国人住民の目線でどんなことに困っているのかを探り、それに対する正しい情報を伝え、それをどう使っていくのか、それぞれの立場に立って最善の道と一緒に考えることをしてきました。これからもそれらを大切にMICHIの活動を続けていきたいと思っています。

MICHI という名前は『‘み’んなの‘ち’から』で、多文化共生という「未知」のフィールドに「道」を作っていきたいという想いを込めてつけました。私たちの活動を通して、それぞれの文化を認め合い、助け合える関係を築いていくためのお手伝いができればと考えています。

---